

チャペル週報

しかし、あなたがたはそれではいけない。
あなたがたの中でいちばん偉い人は、
いちばん若い者ようになり、
上に立つ人は、仕える者ようになりなさい。
(ルカによる福音書 22 : 26)



吉岡記念館

春季宗教運動特集号
2008 5.12 ~ 5.16 No.5
関西学院宗教センター

チャペル・スケジュール

時間 10:35 ~ 11:05 場所 各学部チャペル

5月12日(月) ランバスチャペルアワー「光を浴びて」於：ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)
神 ペンテコステ礼拝 水野 隆一(神学部教授)
経 舟木 讓(宗教主事)
人 ランバスチャペルアワーに合流

5月13日(火) 大学合同チャペル(西宮上ヶ原) 10:20~11:20
「関西学院大学で学ぶ」杉原 左右一(学長)
於：中央講堂
大学合同チャペル(神戸三田) 10:20~11:20
「若き力は 神戸三田キャンパスと建学の精神」
松木 真一(理工学部宗教主事)
於：号館201教室

5月14日(水) 大学合同チャペル(西宮上ヶ原) 10:20~11:20
「もてなしの心と教育」Ruth M. Grubel(院長)
於：中央講堂
大学合同チャペル(神戸三田) 10:20~11:20
「関西学院大学で学ぶ」杉原 左右一(学長)
於：理工学部チャペル

5月15日(木) 神 岩野 祐介(神学部助教)
文 関西学院グリークラブ
社 上ヶ原フィルハーモニック
法 坂本 敦司(神学部大学院生)
経 上ヶ原ハビタットの働きを覚えて
商 English Chapel Richard Stinson(宣教師)
総 春の音楽チャペル 聖歌隊(上ヶ原)

5月16日(金) 院 Christian Morimoto Hermansen(宣教師)
神 金 聖 泰(M1)
文 ハビタット(Habitat for Humanity)によるチャペル
経 舟木 讓(宗教主事)
人 山内 一郎(名誉教授)
理 「われ山に向かいて目をあぐ」松木 真一(宗教主事)

ランバス早天祈祷会 毎金曜日 午前8:20~8:40 於：ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)

5月13日(火) 宗教運動のために 山本 圭子

5月16日(金) 経済学部のために 杉山 直人

総合政策学部早天祈祷会 毎木曜日 午前8:40~ 於：宗教主事室

大学キリスト教週間への招き 「逆転の真理」

山 本 圭 子

スクールモットーMastery for Service は、関西学院の建学の精神をよく表していると言われます。この短いフレーズが見事なのは、「奉仕のための練達」と訳すと隠れてしまう、master と servant という対立する言葉がはめ込まれており、「人の上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい」（ルカによる福音書 22:26）という聖書のメッセージと結ばれている点です。このような通常の価値観の逆転とも言えるメッセージは、聖書のいたるところに見ることができません。

「自分の命を救いたいと思うものはそれを失う」「悪に報いたい、と云ってはならない」「わたしは知恵あるものの知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする」「悩みは笑いにまざる」「財産を持つ人は不幸である」「狭い戸から入るように務めなさい」

旧約聖書・新約聖書を通じて最大の、逆転のメッセージは、人の死が終わりではなく、むしろ始まりであるとされていることでしょう。どれも、あっさりとは頷くことのできない発想ばかりですが、それだからこそ、かもしれません。これらの中に現実の社会で生きて行くための、厳しくも希望の光となる道しるべをいくつも読み取ることができるのです。Mastery for Service はその一つです。

関西学院の創立者であり初代院長であるランバス先生は、無一文と言える状態で学院の創立を志し、「奇跡的な偶然の連続」によって、逆転本塁打のような壮大な事業を達成しました。当時とは比較にならないほど広大な関西学院の中で、学院にかかわるすべての人たちの訪れを待ちながら、ランバス先生を支えた強く深い精神は今も生きています。表される言葉は一つではありません。みなさんのそれぞれに向けられているメッセージを、見いだしてほしいと思います。

（宗教活動委員会委員長・文学部准教授）

Education and the Spirit of Hospitality

Ruth M. Grubel

At the beginning of each academic year, we look again at the founding principles of our school, to ensure that we are still operating according to the fundamentals established in 1889. These are the principles that make Kwansei Gakuin unique, and are the basis for our mission.

Usually, we remember the founding fathers of our school; people like W.R. Lambuth, Y. Yoshioka, and C.J.L. Bates who served as teachers and administrators of the young Kwansei Gakuin. However, the wives of the founding fathers were not stay-at-home people who worked only to keep a comfortable home for their families. The North American women were just as active as their spouses in teaching at various schools, churches, and in their homes. Through it all, they worked hard to nurture their own families, as well as to provide a warm welcome for anyone who visited them. As Kwansei Gakuin became established in Kobe, the teachers and their families who lived on campus became important role models and adopted families for the resident students.

Living among these non-Japanese missionaries on campus was the Yoshioka family. Reverend Yoshioka became the chancellor of Kwansei Gakuin after the departure of the founder, W.R. Lambuth, just two years after the establishment of the school. Under Reverend Yoshioka's leadership over the next twenty-four years, Kwansei Gakuin survived anti-Christian opposition and many financial problems to become a well-respected institution in the community. Supporting Reverend Yoshioka throughout this time, was Mrs. Hatsune Yoshioka, his wife. Mrs. Yoshioka was one of the first graduates of Kwassui Jogakko a mission school in Nagasaki. Before marrying Reverend

Yoshioka, she had moved to Kobe to participate in the Christian church projects which had just begun there. Even after her marriage, Mrs. Yoshioka continued to be involved. For example, during the year 1891, she visited 313 houses, held 105 prayer and Bible study meetings, and worked with poverty-stricken children. She also opened her home to the students of Kwansei Gakuin who became like a second family. In contrast to the welcome provided by Western families who lived on campus, Mrs. Yoshioka ' s hospitality was nostalgic to the boys and young men who studied there. Many of these students had to live away from their own homes, so the warm atmosphere of the Yoshioka family must have been a critical element in the success of their education.

Three years ago, the Christian Center was rebuilt, and the new building, next to Lambuth Chapel, now houses, not only the Christian Center, but the offices for the School of Theology, the Institute for Human Rights Research, and the Research Center for Christianity and Culture. Many student groups also have club activity rooms there. This building was named the Yoshioka Memorial Hall, and I would like to think that through its many activities, Kwansei Gakuin students today can find a welcoming place where they can gather, practice for musical performances, and participate in various academic events in a more relaxed environment. I hope that this spirit of hospitality which was reflected in the Yoshioka home in KG ' s early years, is still alive at the Yoshioka Memorial Hall, and that it will spread the spirit of welcome and openness throughout our school.

(Chancellor)

関西学院大学で学ぶ

杉原 左右一

わが国では現在多くの大学生が、主に受験勉強の必要から、文系または理系に偏った勉強をおこなって大学に入学してきます。大学に入学して初めて、いままであまり勉強したことがない分野の勉強に取り組み、それに興味を抱くようになる人も少なくありません。また、勉強の内容が、知識量や、記憶力の側面に主眼が置かれがちであり、思考力を養う訓練が不足していることもよく指摘されています。

ここで特に強調したいことは、自明なことではあるとはいえ、文系、理系は便宜上の区分けにすぎず、人間が関わる問題の多くは、そもそも文系、理系が融合しているものであり、かつ、単なる知識量の豊富さのみで解決できるものではないということです。例えば今年北海道洞爺湖サミットが開かれますが、地球温暖化問題、地球環境保全問題を例にとってみたいと思います。この問題に取り組むためには、少なくとも文系と理系の基礎的知識を共有していることが必要であり、かつ単に知識量だけではなく、問題の所在を正しく認識し、問題をどの様に解決すべきかを提案する能力が重要となってきます。これは一例にすぎませんが、大学で勉強するにあたっては、自身の専攻分野の勉強と並んで、異学問分野に関する基礎的知識を持つことや、国際的な視野を持って物事を捉えることが必要であり、かつ知識の量だけではなく、未知なる問題の解決にあたる意欲と創造的な発想を持つことが重要であると思うのです。このように考えたとき、まず文系、理系を問わず、異分野をも含めた幅広い基礎学力の向上を図ることが重要であり、しっかりとした基礎学力を基にして、さらに専門課程で専門性の高い、創造的な学習・研究に取り組んでいただきたいと思うのです。

次に、大学は学問を志し、勉強する場所ですが、これと同時に、自己を確立し、自分の進むべき方向を見出だす場所でもあってでしょう。この点に関連して、孔子の有名な次の言葉を思い出さずにはおられません。

『学^{くら}びて思^{あやう}わざれば則ち罔く、思^{あやう}いて学^{くら}ばざれば則ち殆し。』(論語)

たとえ万巻の書を読破し、あらゆる事柄を学んだとしても、何のため、誰のために学ぶのかについて自ら沈思黙考することがないのなら、万巻の書も単なる知識の膨大な堆積でしかないでしょう。また逆にいかに高い志を持っていたとしても、その志を実現するに足る十分な知識を有し、学問を研鑽する努力が伴わないのなら、その様な志も単なる絵空事に終わってしまうでしょう。

そもそも大学で、「何のために勉強するのか」、「何のために生きるのか」について絶えず自問することが重要であり、また不可欠であると思います。ただし、この問いに対しての一定不変の正解はありません。皆さん一人一人がその答えを見出していかねばならないのです。その時一つの大きな指針を与えるのが関西学院の建学の精神に他なりません。この建学の精神を簡潔な言葉で表現しているのがスクール・モットーである“Mastery for Service”(奉仕のための練達)という言葉です。これまで多くの関西学院の卒業生がこの“Mastery for Service”という言葉に勇気づけられ、励まされて歩んできました。皆さんも在学中のみならず、これからの人生のさまざまな歩みの中でこの言葉と出くわすことになるでしょう。ぜひ在学中に“Mastery for Service”という言葉の意味とところや、その現代的意義について折に触れて自身で考え、思いを巡らせていただきたいと思います。

知的世界の創造を目指し、また、人生の確固たる基盤を形成するためには、皆さん一人一人が心の目を開き、夢と大志を抱いて、未知なるものへ積極的にチャレンジする精神を持つことが重要であると思います。聖書の「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」(「マタイによる福音書」第7章第7節)という言葉はそのことを的確に言い表しています。この聖句を関西学院大学に入学されたすべての新入生の皆さん、並びに在校生の皆さんにお贈りし、皆さんの学生生活が実り豊かなものとなることを心から祈ります。

(学長)

・・・力、若きは力ぞ（校歌『空の翼』）

松 木 真 一

校歌『空の翼』の一節「・・・力、若きは力ぞ」！ 関西学院大学に入学してきた多くの新入生たちの若い力やエネルギーに満ちあふれている姿に、何かびったりの歌詞でもある。この「力」という歌詞に接するとき、実は私自身もたまにはあるが思い出すことがある。関西学院中学部には当時、相撲部があった。ただ背が高いというだけの理由で、勧誘を受けていたこともあって、よく放課後の部活練習を見に行った。その時のことである。顧問をしておられた社会科の浜田幸四郎先生の熱血指導の強烈だったこと。取り組んでいる最中、部員が土俵際に追いつめられると、メガホンの先をその部員の耳もとまで近づけて大声で必死に連呼するのだ。「がまん。耐えろ。力出せ！」と。大抵は、その大声の方に耐えられなかったようであるが、とにかく先生のその叫び声は私の脳裡に突き刺さったまま中学部、高等部、大学そして今に至るまでも頭のどこかで叫び続けている。もっと耐える力を！もっと忍耐力を！と。これまでも何かがあった時、不思議にもこの叫びを思い出しては励まされたり、元気づけられたりしたこともある。「若きは力ぞ」と校歌を歌いながらも思い出すほど、どこまでも印象深い思い出である。

しかしながら、また新入生も在生も当然のことではあるが、学生時代にはいわゆる土俵際、瀬戸際とも言うべき状況に直面することもきつとある。勉強や研究が行き詰まる、人間関係や部活がうまくいかない、予想もしない問題やアクシデントに見舞われ、悩み疲れて心身ともに追いつめられてしまう・・・。何も在学中に限らず、これからの長い長い人生においても、である。そういうときこそ、自らの若さという素晴らしい力を存分に発揮し、しっかりと耐えて乗り越えてゆくように、という力強いメッセージを関西学院は今も校歌を通して一人ひとりに贈り続けているのである。

聖書の中に興味深い言葉がある。

「私たちは四方から苦しめられても行きづまらず、途方に暮れても失望せず、迫害されても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」（コリント4：8-9）

この力強い聖句のキーワードは「・・・にもかかわらず」（ティリッヒ）である。苦しめられている「にもかかわらず」行きづまらない、途方に暮れている「にもかかわらず」失望しない・・・！

実際、一人ひとりの行く手には、さらに深刻な行きづまり、決定的な土俵際、瀬戸際、自力ではもうどうにも耐え難い大きな壁、限界状況を経験することも一度や二度はあるだろう。ここではもう挫折するほかない、絶望してもはや立ち直ることすら出来ない、というケースも多い。しかし、そのような状況にもかかわらず、決して挫折することも絶望することもなく、なお自分の人生を力強く生き抜いていくことができるとするならば、それは、まさに人知を超え人間の力を超えて、私たちの存在の深みから勇気づけてくれるような根源的な力、そのような力から支えられ励まされ、前向きに生かされていく、ということによってにほかならない。関西学院の宗教運動は、このような「力」について考える絶好のチャンスではないだろうか。

（理工学部宗教主事）

ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ヶ原キャンパスのランバス記念礼拝堂では、5月に入りますと学生音楽団体による恒例のミニコンサートが開かれます。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

- 5月13日(火) 関西学院大学混声合唱団エゴラド
- 5月15日(木) 関西学院グリークラブ
- 5月20日(火) 関西学院大学交響楽団弦楽アンサンブル
- 5月22日(木) 関西学院大学交響楽団管楽アンサンブル
- 5月29日(木) 関西学院大学応援団総部吹奏楽部
- 6月3日(火) 関西学院ハンドベルクワイア
- 6月5日(木) 関西学院ゴスペルクワイア Power Of Voice
- 6月10日(火) 関西学院聖歌隊
- 6月12日(木) 関西学院バロックアンサンブル

いずれも12時50分から13時20分まで、ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)にて。

第176回ランバス演奏会

「カレイドスコープ・アカペラ・ショウ」

廣瀬万佐子(テナー)、坂口敏子(リード)、坂口和彦(バリトン)、広瀬康夫(バス)
KALEIDOSCOPEはランバス演奏会初登場のアカペラコーラスグループです。
クラシックからジャズまで幅広いレパートリーを持ち、2006年7月にはアメリカのIndianapolis市にてショウを行いました。

- と き：5月19日(月) 17:00 開演
- と ころ：ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)
- 主 催：宗教センター
- <入場無料>

大学キリスト教週間プログラム

私たちの「賀川豊彦献身100年」講演 賀川督明氏

- と き：5月16日(金) 15:00~
- と ころ：関西学院会館レセプションホール
- 主 催：キリスト教と文化研究センター、関西学院生活共同組合50周年企画委員会

関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第二・第四日曜日に、教職員と学生有志による礼拝が行われます。
一部英語を用いるバイリンガル形式です。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

- 5月25日(日) 午前10時~11時
- 関西学院会館ベーツチャペル

大阪梅田キャンパス・チャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローチタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜にチャペルアワーを開催しています。

- 5月16日(金)、23日(金)、30日(金) 18:00~18:20
- 【メッセージ】田 淵 結(大学宗教主事)
- アンドレアス・ルスターホルツ(宣教師)